

村上輝康氏

(産業戦略研究所長、元野村総研理事長)

野村総研の鎌倉時代の同僚で、その後も変化するメディアの先端に常に主体的に関わってきている校條論さんの新著「ニュースメディア進化論」を、ノンストップで一気読みした。新聞、テレビ、インターネット、SNSと次々にニュースメディアを乗り換えてきたが、依然として新聞に対する愛着を捨てきれない世代には、堪えられない面白さを持つ本である。

これは所謂メディア論ではない、ニュースメディア論である。エンタメやコミュニケーションを扱うのではなく、我々が思考や行動変容や価値観形成の拠り所とするテキスト系のニュースメディアに焦点をおいてメディアを論じている。

嬉しいのは、テレビの登場から始めるのではなく、明治維新前後の瓦版から新聞に切り替わる頃からのニュースメディアの進化を辿ってくれていることである。これによって、すでに明治時代に仮名垣魯文の諸新聞縦覧茶亭という定額読み放題で複数の新聞が読める、英国のコーヒーハウスにあたるような施設があったことや、新聞解話会というメディアイベント的な仕組みもあったという興味深いエピソードも紹介されている。

そこからスタートして、あくまでニュースの利用者の視点からメディアがどう進化してきたかを辿っているが、その立脚点は常に、紙面構成の一覧性自体に、アジェンダ設定や優先度評価等の濃密な情報が詰まっている最強のニュースメディアである新聞にある。

朝日新聞のやらせや日経新聞の誤報等を見てきてはいるが、それらには必ず強い社会的制裁がかかり、コンテンツに対する信頼性や中立性を保とうとするガバナンスが効くことを知っている我々の世代は、ニュースコンテンツに新聞レベルの質が常に保たれることを期待するが、残念ながらニュースメディアのエントロピーは増大するばかりであるようである。

そのかわり校條さんのいう利用者の総表現者性は比較にならない程増大している。

岸田徹氏

(ネットラーニンググループ代表)

読みました。さすが校條さん。

朝日読売毎日の宅配型家族メディアとしての新聞が大きく部数を伸ばしたのは、製造業中心にめざましく経済がのびた大量生産大量消費の時代。総中流化時代のメディアとしてでした。社会構造経済構造が変わり、中流が消え、単身家族が増えて、大新聞の基盤が失われた。大量生産大量消費の広告ももうない。

そこにあらわれた救世主がデジタル!

大新聞は、個別メディア化の手段を手に入れた。別の収入モデルの構築の可能性も手に入れた。

さて、大新聞経営者は、このチャンスをつかすことができるのか?別の創造的破壊者が生まれるのか?

校條さんの本を読んで、いろんなことを考えさせられた。(2019/2/6,Facebook)

◎この本、オススメです。読み始めたら、面白くてやめられない。この本の価値は、明治以来の新聞の歴史をととても上手に整理していること。そのベースの上で現在を考え、いろいろな提言をしていること。この本をベースに、メディア論を語ることは有益だと思います。(元新聞記者。デジタル事業開発担当)

◎とても読みやすいですね。勉強になります。(社会学者)

◎生きたメディアの歴史と構造が語られ、メディアの今をより楽しみたい方に必須の一冊となっている。(北村良輔氏、amazonレビュー)

◎「学び」とは何か、どうあるべきかについて、たいへん感銘を受けました。(たおさん、amazonレビュー)

適切なメディアリテラシーをもった利用者の拮抗力が働けば、より質の高いニュースメディアが実現する可能性もある。

これは、世代間の対話の手段として長く使えそうな好著である。(2019/1/28,Facebook)